

## 自然保護の窓

### 霊長類保護アピールの作成にむけて

国際霊長類学会 (IPS) の第11回大会が、7月20日から25日まで、西ドイツのゲッテンゲンでおこなわれた。

霊長類の保護に関する関心は深く、プリーナリー・セッションとして R. Mittermeier 氏の基調講演、シンポジウムは24、25の両日にわたって終日おこなわれ、37題の講演が発表された。これ以外に「自然保護と生態学」というテーマで10題の一般講演もおこなわれたので、保護関係の講演は合計47本におよんだ。都合により私は、アフリカ関係の12本の講演をきいただけだが、最大の問題はアフリカの貧困による自然保護行政の後退である。豊かな国が、実質的な援助をしないと、既存の国立公園の維持さえ困難であることがうきばりにされた。それにしても、47本の発表のうち、日本人のものはただの一件もないというのは悲しむべきことではなからうか？

7月21日の午後には、John Oates 氏 (IPS 自然保護担当副会長) を議長とする自然保護委員会 (Primate Conservation Committee) がひらかれ、Oates 氏の要請を受け、ブラジル、米国、ベルギー、西ドイツ等の代表とともに、私もオブザーバーとして参加した。

今後の IPS の最優先プロジェクトとして、開発途上国の自然保護関係の学生に対する奨学資金援助 (IPS Scholarship Program)、ゴリラ、ウーリーモンキー、タイの霊長類の保護などが決められた。IPS が現在保有している資金は、1982年のアトランタでのアピール実行のため集められた6800ドルと、主として会費収入 (個人会費10ドルのうち、半額が自然保護につかわれている) からなる1万ドル強にすぎない。6800ドルは上記の奨学資金に使われることがきまっている。事務経費をさし引くと、9000ドル

が4つのプロジェクトに配布されるわけである。資金不足と、あつめた金の分配・用途に関するトラブルの問題を解決するため、次のように、自然保護の組織と運営方法を改めることがきめられた。

(1) 霊長類保護委員会は再編成され、Chivers, Erwin, Eudey, Marsh, Mittermeier, Oates, Robinson, Thornback の8氏が、アドミニストレーション、援助要請の審査、問題の決定などをおこなう核となる。これ以外に、'Special Consultants' を任命し、その役割は、特定の分野に関する情報の提供と、専門的意見を提出することである。

(2) 関連国内学会 (PSGB, ASP, PSJ など) は、それぞれの "Primate Conservation Appeal" を作成すべきである。また、将来は、関連国内学会が資金あつめの責任を負うべきである。

(3) 国内学会は、優先すべき保護プロジェクトを決め、それを実行するための資金として、"Action Fund" を設けるべきである。

(4) "Action Fund" を、国外での保護プロジェクトにも使えるよう、霊長類保護委員会と密接な連絡をとるべきである。

(5) 国内学会と IPS 本部の連絡調整係として、"International Appeal Coordinator" をおき、1986-88年の間は、ケンブリッジ大学の David Chivers 氏が担当する。

霊長類の保護活動は、PSJ 設立にあたっての最も重要な目的であった。霊長類研究所サル委員会による「サル類の飼育管理および使用に関する指針」と PSJ 委員会による「サル類を用いる実験遂行のための基本原則」の策定、屋久島国割岳西斜面を天然記念物地域とする要望書、および同地域における県道改修に関する要望書の提出などは、霊長類学会会員によるこの一年間の成果であった。しかし、私たちの力不足もあって、ニホンザル棲息地の森林伐採等による環境破壊、猿害、餌づけなどもっとも重要な「国内問題」について、まだ手つかずの状態である。

‘国際問題’としては、キンクロライオンタマリンの返還がやっと実現の運びに至ったのは喜ばしい。これを機に、履歴をよく調査もせずに霊長類を入手することはやめたいものである。

国内はもちろん、国外でも会員諸氏が研究をおこなっている地域・対象の保護活動は、それぞれの研究者がもっとも情熱をもちやうし、その専門的知識を十分に生かせるので、PSJの行動計画にとりこんでいきたい。さしあたり、ザイルのワンバ基地周辺に、ピグミー・チンパンジーの保護区をもうけたいという加納隆至、黒田末寿氏らの計画は、PSJの支援に値するものであろう。国内では、屋久島、下北、房総、志賀高原などが焦眉の地域であろう。

PSJの霊長類保護アピール作成と、Action Fund設立のためには、多くの会員の提案と積極的な参加なしには不可能である。そして、現実にフィールドをもっていない会員も、また忙しくて活動の実行に参画できない会員も、資金援助という形なら、誰でも自然保護活動に参加できるわけである。「誰にでもできる」と書いたが、もちろんいうは易く、おこなうは難し、である。自分と直接に関係のないプロジェクトにお金を出したがらないのは人情である。

しかし、ここが思案のしどころである。今の多様な種が減少していくことは、私たちの生活はもちろん、学問をも貧困にしていくことに他ならない。すなわち、多様な種の存在こそ、医学であれ、形態学であれ、行動学であれ、研究の生命線である。多様な環境、バラエティに富んだ種の存在が、比較を可能にし、生態系と進化の研究を支えるのである。

ダーウィンが「卑しい動機」と呼んだ、具体的な利得もある。私たちが直接関係のない地域・対象の自然保護に資金援助という形で協力することによって、次に私たちの地域・対象に大問題が起ったとき、精神的であれ、経済的であれ、支援のお返しを期待できるであろう。「情は人のためならず」である。私は、かつてタンザニアのマハレ山塊の国立公園化とそれに伴う日本政府による無償援助を要請し、レター・

キャンペーンを組織したことがある。このとき、Wrangham, McGrew, Hinde, Mason, Bernstein, Oates 氏ら約100名におよぶ霊長類研究者が、キャンペーンに参加してくれた。残念ながら、いまだに無償援助は実現していないが、国際協力事業団による技術協力が、これまで10年間もつづけてこられた大きな理由は、多くの人々が首相と外相に手紙を書いてくれたためだろうと思う。私はこのときの感激をいまでも忘れていないし、私が他のレター・キャンペーン等の活動に参加するのも、その感謝のあらわれでもあるのである。

さて、私たち自身の行動計画(Primate Protection Appeal)を作成したあとの話だが、“Action Fund”はいかにして設けるべきだろうか？IPS保護委員会の経験によると、最も効率のよい資金獲得の方法は、

a) 野生動物保護に関心の深い慈善家、財団、団体に直接アプローチすること、

b) 大学や動物園など適当なところで、講演や展覧などをおこない、そこでなにか物品を販売すること、

c) 地域にみあった行事、祭典などをおこなう、

ことだそうである。b)の物品とは、ステッカー、バッジ、ポスター、Tシャツ、絵葉書、ペンダントなどであろう。ゲッチンゲンでは、Chivers氏が、雑誌“Primate Eye”の自然保護特集号を10マルク(約800円)で販売していた。

Action Fundのつくり方についても、会員の皆さん方のアイデアをつのりたい。もとより、私たちPSJの自然保護担当理事・幹事は座して待つことはせず、今年中にアピールや基金の原案を準備する予定である。

(東京大・理 西田利貞)